

平成30年度 情報工学コース卒業研究報告要旨

武田(浩)研究室	氏名	高橋良輔
卒業研究題目	格要素の典型性と連想性に基づいた換喩判定	
<p>換喩とは比喩の一種であり、概念の隣接性に基づく比喩とされる。たとえば「漱石を読む」は、「漱石」と「小説」の間の「作者-作品」という概念的隣接性によって成り立つ換喩であり、一般的に「漱石の作品を読む」のように解釈される。換喩を含む多くの文は、リテラルに解釈すると大きく意味が変わってしまう。たとえば「漱石を読む」をリテラルに解釈すると、「漱石」という人物自体が読む対象となるような意味になり、「漱石の作品を読む」という換喩的解釈とは大きく意味が変わってしまう。したがって、自然言語理解のような文意の抽出を必要とするタスクにおいて、文が換喩を含むか否かを判定することは重要であると言える。そこで本研究では「漱石を読む」のように動詞とその格要素1つからなる文を解析対象とし、与えられた文が換喩を含むか否かの自動判定に取り組む。</p> <p>本研究では、換喩性を判断する手がかりとして、格要素の典型性と連想性を考える。まず格要素の典型性について考えると、たとえば、換喩でない「小説を読む」の場合、「小説」は「読む」のヲ格要素の典型例となっているのに対し、換喩である「漱石を読む」の場合、「漱石」は「読む」のヲ格要素の典型例とはなっていない。このように対象の格要素と動詞のペアが換喩である場合、その格要素はその動詞の格要素としての典型性が低いと考えられることから、格要素の典型度合いを評価することで、換喩かそうでないかをある程度判定できると考えられる。しかし「心情を読む」のように、換喩ではないが、格要素の典型性が低くなるような用例もある。そこで次に格要素の連想性について考える。ここで、格要素の連想性とは、解析対象として与えられた格要素が、与えられた動詞の代表的な格要素となる名詞をどのくらい強く連想するかの度合いを表すものとする。たとえば「漱石を読む」の場合、「漱石」は「読む」の代表的なヲ格要素となる「小説」のような名詞を想起しやすいので、連想性が高いと言える。このように対象の格要素と動詞のペアが換喩である場合、与えられた動詞の格要素の代表的な用例と、解析対象として与えられた格要素の連想性が高いと考えられる。したがって本研究では、与えられた格要素と動詞のペアに対し、上述の典型性と連想性をスコア化して、典型性スコアが一定以上小さく、連想性スコアが一定以上大きい場合に、与えられたペアを換喩と判定する手法を提案する。</p> <p>実験では、換喩の用例と換喩でない用例からなる開発用データ60文と評価用データ120文をそれぞれ作成し、開発用データを用いて換喩判定における典型性スコアと連想性スコアの閾値を決定した後、閾値における評価用データでの換喩判定の正解数を評価した。その結果、手法ごとの正解数は、典型性のみを考慮した手法では120文に対して81文、連想性のみを考慮した手法では81文、典型性と連想性の両方を考慮した提案手法では94文となり、提案手法の有効性が確認できた。</p>		